

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.008-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介して参りますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 :小宮豊隆資料(追加分)から1ヶ所「小宮豊隆携行手帳」中記載『修善寺日記』

■資料のひとことPR:漱石の人生史上最大のピンチ「修善寺の大患」の様子を詳細に綴る迫真のレポート

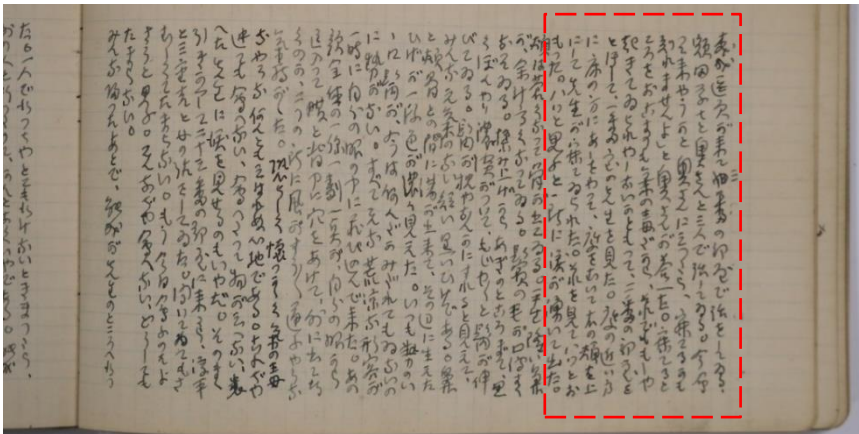
■資料写真 :原文 4 頁目(明治 43 年[1910]年8月 30 日条)



▲日記が記される手帳

※ついでのひとくちメモ

日記は、4mm四方のマスを殆ど逸脱することなくびしりと細かい字で書き込まれています。こんな書き方ができる小宮さんはスゴイ！と思うと共に、几帳面で繊細な人だったんだなあと思わせます。皆さんはマネ出来ますか？



▲史料原文

➡『史料翻刻』

森成医員が来て三番の部屋で話をしている。額田学士と奥さんと三人で話してゐる。今會つて来やう可と奥さんに云つたら、寝てる可も知れませぬよ」と奥さん可答へた。寝てる可もころをお古すの毒だから、それでももしや起きてゐられやしない可ともつて、二番の部屋をとほして、一番室の先生を見た。庭の近い方に床の方にあしをやって、庭をむいて右の頬を上にして先生可寝てゐられた。それを見てハツとおもつた。ハツと思ふと一所に涙可湧いて出た。

▲翻刻文

■資料データ File

- ・形状/材質/法量：厚手紙表装 携行手帳（糸かがり綴じ）/西洋紙・方眼4mm/30 16.2×29 10.0×厚さ 1（単位cm）
- ・制作年代/時代背景：明治43（1910）年/日韓併合条約の調印。大逆事件で、幸徳秋水らが検挙される。
- ・注目ポイント：漱石の病状の変化は勿論、自身や周囲の人々の動静をこと細かに記した臨場感溢れるレポート。

■資料メモ

文豪・夏目漱石が生死の境をさまよひ、その後の作風に大きな影響を与えたとされる事件「修善寺の大患」。この時、漱石は約30分間「死んだ」とされています。これは、永らく患っていた胃潰瘍が悪化した末の出来事でしたが、本人は勿論、周囲に与えた影響は甚大でした。中でも、漱石を父とも慕い、その庇護下でようやく自我を形成し、自立しはじめた小宮にとってその衝撃は天地を揺るがす程のもので、「ソウセキキトク」の電報を受け取った小宮は、準備中だった結婚式と新婦を放り出して、一路修善寺へ駆けつけました。宿に着いた小宮は、おそろおそろ漱石の病状を聞きますが、何とか命はとりとめ快方に向かっていると聞いて安堵すると共に、その後は病状が落ち着くまで献身的に漱石に寄り添います。この手帳には小宮が修善寺に到着した8月27日9:00から、病状がひと段落して東京の漱石留守宅に赴いた9月17日6:00までの約22日間の養生の様子が記された貴重な漱石の看病日記の手帳です。

■整理担当者のつばやき

漱石の為に花を摘み、髯を剃り、アイスクリームを作り、小宮の看病は涙ぐましいばかり。小宮は漱石を本当に「おとっさん」と思っていたと思われます。なお、この時の小宮の姿が漱石作品「こころ」の私にそっくりだと、後に森田草平が評しています。

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

- ・小宮豊隆著「漱石先生と私たち」中央公論社刊 2023/夏目漱石著「思ひ出す事など」岩波書店刊 1986/小宮豊隆著「修善寺日記」昭和11年
- 2. 本文の情報は令和5年12月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。
- 3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

編集・発行：みやこ町歴史民俗博物館/2023